

解 答

□

- 問一 A 競技 B 始終 C 遺伝 D 油断 E 順風
 問二 1 オ 2 エ 3 ウ 4 イ
 問三 どこでもかしこでも「いい子」になりたいというのが、だれにもある人情の自然だから。
 問四 宿命
 問五 ア
 問六 イ
 問七 足〔をすくいに〕
 問八 エ

□

- 問一 1 カ 2 イ 3 オ
 問二 a ア b ウ c イ
 問三 思えない。
 問四 ウ 問五 イ
 問六 菜穂のおかあさん
 問七 ウ 問八 エ
 問九 自分がやっぱりママのことを好きなこと。
 問十 いつもおどろくほどのそっけなさで、自分の電話を垂矢にとりつぐだけだったから。
 問十一 いきなり難しそうな言葉を言われて、すぐには理解できないでいる様子を表すため。
 問十二 中学生になり13歳にもなったのだから、いつまでもこれまでと同じ子どものつもりでいてはだめだということ。

解 説

□ 出典は、福田恒存「私の幸福論」。

問二 1…後に「もっと小さなこと」の例が挙げられているので、「たとえば」が入ります。 2…うまくいっているあいだは、それらがすべて自分の力でなしえたものとおもいたがる。失敗するとその原因を自分以外のところにさがしはじめる。空欄の前後で内容がくいちがっているので、「しかし」が入ります。 3…成績が悪くなった理由はいくらでも見つかるという内容に、それらの理由はいくらでも拡大できるという内容を加えているので、「さらに」が入ります。 4…重荷をおろして気楽な状態になろうと望むことを、責任・自由からの逃避と言いかけているので、「いわば」がふさわしいといえます。

問三 「自分のやることがうまくいっているあいだは、それらがすべて自分の力でなしえたもの」とおもいたがる理由は傍線部の後のどこにも書かれていないので、「誰もそうおもいたがる」理由は、ひと言でいえば、「それが誰にもある人情の自然だから」となります。「それ」が指している内容である「つまり一口にいえば～ということでありま

す」の中のどちらの語句を用いるかについては、四十字以内という条件にしたがって、前半の「どこでもかしこでも『いい子』になりたいということ」を採ることになります。ここに示した手順は、記述の答案の作り方の一例でもあります。

問四 前々段落からの話の流れは、失敗の原因・理由を、ほんとうは「怠惰と無気力」のせいなのに、宿命的なものと考えようとする、そのほうが気が楽だから、ということなので、空欄には「宿命」という語が入ります。

問五 イの選択肢がまぎらわしいですが、よく読めば、傍線部「この理由づけ」の説明がされているだけで、設問のなぜ「うそ」と言っているのかという問いに対する答えになっていません。その答えについては、直後に「同胞にたいしてではありません。自分にたいしてであります」とあるので、アの選択肢が正解です。

問六 「自由であるためには、私たちの精神はたえず緊張していなければなりません。」の一文に筆者の考えが集約されています。

問七 慣用表現「足をすくう」は、相手のすきにつけいって相手を失敗・敗北にみちびく、という意味です。

問八 空欄には「自由など要らないといいだしかねない」と類似の内容が入ることを文脈から読みとってください。

㊦ 出典は、石井睦美「卵と小麦粉 それからマドレーヌ」。

問二 いずれも文中での意味が問われていますが、それぞれの語句の本来の意味から離れているわけではありません。

a…「こだわる」は、「傍から見れば気にしなくていいようなこと」が心にかかる、そのような物事に執着する、ということですから、この文章では「自分の好みをゆずろうとしない」ほどの意味になります。 b…「言いよどむ」の「よどむ」は漢字で書けば「淀む（＝水がとまる、たまる）」で、言葉がとどこおる、言いかけてためらう、ということで、選択肢アがまぎらわしいですが、ここでは本来の意味にそったウを選びます。 c…「見計らう」は、様子を見てころあいの見当をつけるということです。

問三 文末がいずれも「から」で終わっていることから分かるように、「直前の文」の理由を説明していると考えられます。ずっとママが大好きで、離れることなんて考えたこともなかったから、「あのときのわたし」だって「ママもがんばってねって」と言えたとは思えない、ということです。

問四 前問の解説からも分かるように、ママが「半年、料理の勉強のために一人でフランスに留学する」ということは、菜穂たちは半年もの間ママと離れて暮らさなければならないということです。

問五 13歳の誕生日に、ママの「爆弾発言」を聞くまでの「おだやかでなんの不安もなかったわたしの12歳」は、もはや過去のものになったということです。

問六 「だったらそのままわたしのおかあさんやっててよ」とあるので、「菜穂のおかあさん」と答えます。

問七 「うれしくなって、菜穂を抱きしめようとした」→「そしたら、菜穂がすごく真剣な顔をしてママを見てた」→「どきっとした」→「なにかになることなんて、ママはもうとっくにあきらめてたのに」という順になっていることをしっかりおさえましょう。選択肢アは「菜穂に見ぬかれた」、イは「菜穂が将来なりたいたいものについて」、エは「菜穂のかわいらしい質問」に「いとおしさを感じた」、という内容がふさわしくありません。

問八 「菜穂にわかってもらって行きたい」と、自分の思いを必死に伝えようとするママを、菜穂は「もういいよ」とつきはなしてしまいます。ママがフランスへ留学するということは、菜穂たちをおいて半年もの間いなくなってしまうということです。そんなことを勝手に決めたのだから、いきどおる菜穂の気持ちも、ママはよくわかっています。それでも、やっぱり留学したい、その気持ちを菜穂にわかってほしいのに、どうしても納得してくれないので、ママはつらく思っているのです。

問九 電話の声から想像するとそっけない「亜矢のおかあさん」にくらべると、愛想のよいママのほうがずっといいな、と菜穂は思っているのです。

問十 前問でも触れたように、菜穂は電話の声から想像して、会う前の「亜矢のおかあさん」をそっけない人だと思いこんでいました。そのことは、本文の「わたしは、これからはじめて会う亜矢のおかあさんのことを～うちのママの愛想の愛想のよさとは対照的だ」の部分に描写されています。この中の「いつもおどろくほどのそっけなさで、わたしの電話を亜矢にとりついでしまう」という言葉を中心に、理由を説明します。

問十一 通常は漢字で書き表すところを仮名表記するのは、その言葉の意味が理解できていないことを示す場合か、その言葉を強調する場合だと考えていいでしょう。ここでは、この後の地の文に「亜矢のおかあさんの個人的感情？／亜矢はそれ以上言おうとしない」とあるので、前者の用法です。

問十二 ママと離れて暮らしたくないと思う菜穂は、自分でも言うように「無力な子ども」なのです。「その意識を変えなさい、ママの気持ちを变えようと思うのではなく、あなたが変りなさい」と亜矢は菜穂に言っているのです。前書き部分の「じぶんがもう子どもじゃないって思ったときって、いつだった？」という亜矢の言葉も参考にとよいでしょう。12歳までの誕生日は小学生だけれども、13歳の誕生日はもう小学生ではない、中学生なのです。あなたは13歳の誕生日を、どういう中学生になって迎えるでしょうか。